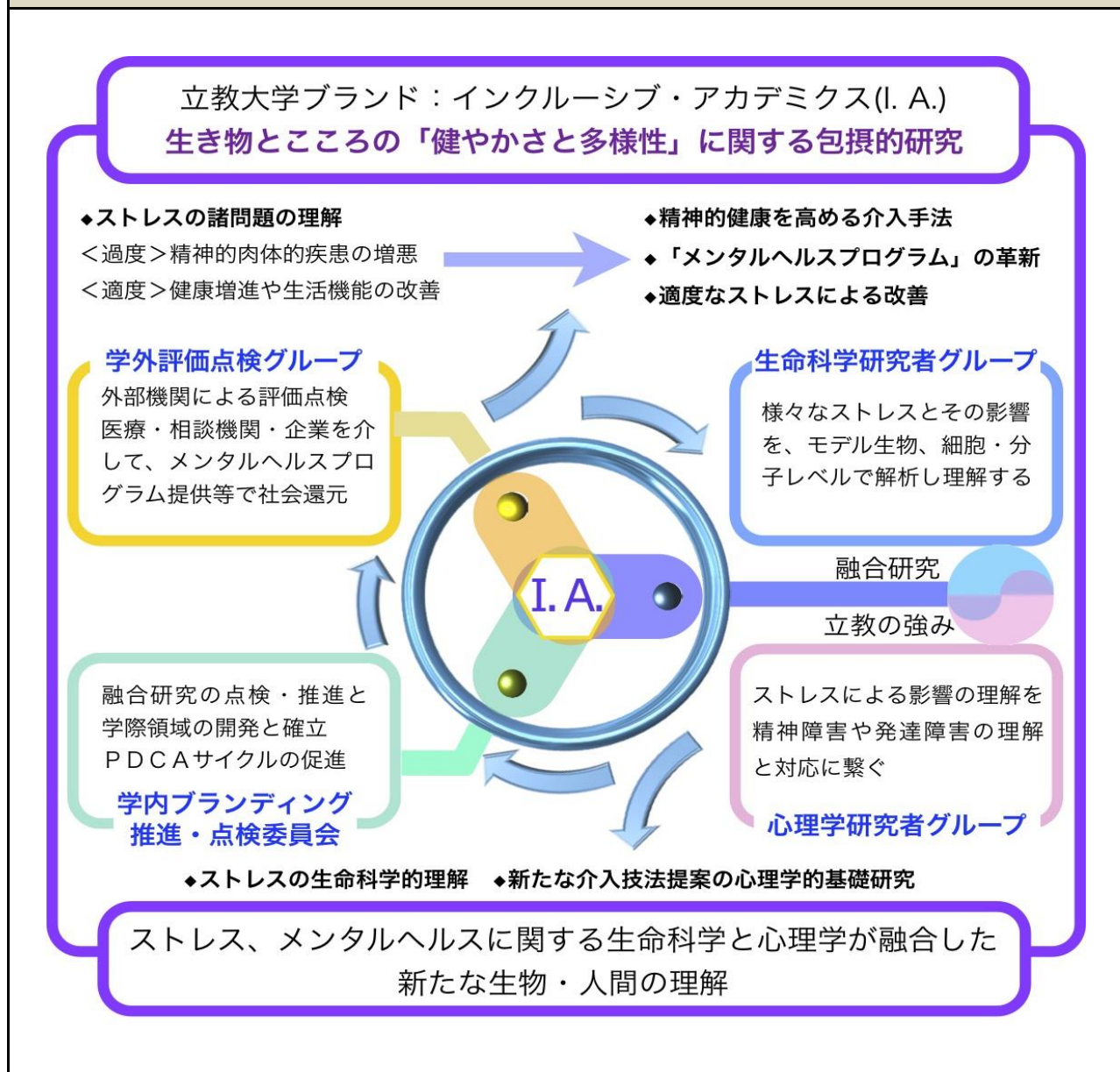


平成28年度私立大学研究ブランディング事業計画書

1. 概要（1ページ以内）

学校法人番号	131095	学校法人名	立教学院			
大学名	立教大学					
事業名	インクルーシブ・アカデミクスー生き物とこころの「健やかさと多様性」に関する包摂的研究					
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	16600人	
参画組織	理学部、現代心理学部					
審査希望分野	人文・社会系	○	理工・情報系		生物・医歯系	
○					○	
事業概要	加速するグローバル社会の中でストレスが増大している。本事業では、ストレスに対する分子・細胞レベルの解明を行う。また、メンタルヘルス問題が発現するメカニズムを心理学的に探究する。生命科学研究と心理学的研究を学際融合することで、生き物とこころの「健やかさと多様性」を包摂する新たな知見を得る。その成果として、精神的健康を高めるプログラムの提案を行い、立教大学のブランドとして社会に向けて発信する。					

イメージ図



2. 事業内容（2ページ以内）

（1）事業目的

本事業では、ストレスについて生命科学研究と心理学的基礎研究の融合研究を行う。本事業で目標とするのは、ストレスについての融合研究を核として、生き物とところの「健やかさと多様性」について包摂的研究を行い、生物・人間理解と生活機能改善に関する新たな見解を公表することである。本学（理学部と現代心理学部）と医療機関や製薬会社、地域支援団体などの外部関係機関を中心とした外部有識者との広範な協働のもとに研究を推進し、個と社会に拓かれたリベラルアーツ教育を行う立教大学のブランドを強化する端緒としつつ、その成果を広く社会に還元することを目的とする。

グローバル化が進む現代社会では、めまぐるしく社会の在り方が変動し、その中で個の在り様が問われている。このような激動する社会情勢の中では、軋轢・摩擦・葛藤などが生じ、生物学的・社会的脆弱性を有する個体（個人）の安定的な存立が脅かされる。うつ増加に代表されるメンタルヘルス問題は、その典型例と考えられる。そして、この種のストレス下で発現するメンタルヘルス問題は、解決を要する喫緊の社会問題である。特に増加が著しいうつなどの気分障害と認知症のような精神障害の増悪には、ストレスが強く関わっていることが指摘されている。立教大学理学部では、多数の研究者が「酸化ストレス」「リボソームストレス」「低酸素ストレス」「ストレスによる炎症」といった細胞レベルのストレスを生命科学的手法で研究し、成果を蓄積している。一方現代心理学部では「うつ」「自閉症」「パーソナリティ障害」「加害者家族ストレス」「旅行によるストレス解消」などを対象として心理学的手法により研究を推進してきた。こうした両者の融合研究により生み出されるであろう、新たな介入技法やメンタルヘルスプログラムを、外部協力関係機関（医療機関・相談機関等）へ提案し、社会へ拓く「健やかさと多様性」に関する包摂的研究を行う。

本事業により期待される研究上の成果は、要約すれば、分子・細胞レベルでのメカニズムが個体の成立や機能を支え、個体（生物・人間）の機能が集積することにより総体として組織や社会の作用が相互補完されることの実証である。具体的な研究対象として、環境ストレスとメンタルヘルスを重点的に取り上げ、実証的な根拠を追究する方向性と社会的な還元をめざす方向性とを一体的に融合研究する。すなわちこの研究は、ストレスに関する生命科学的理解を実証的に深めるとともに、その介入技法の提案をするというものであり、本学が自学のブランドとして重視している「豊かな知性」と「折れない心」の育成を、科学的研究の側面から追究し補完・補強するものである。

（2）期待される研究成果

複雑化する物的・人的環境の下では、外部環境変化そのものが生物・人間にとってストレスとなり、分子・細胞レベルでの変化や心理・行動レベルでの変化となって現れる。ただ、適度なストレスを受け、これに適応することにより心身双方に望ましい変化をもたらすことも期待できる。臨床心理学のマインドフルネスや観光心理学のメンタルヘルスツーリズムという考え方は、この肯定的な側面を拡張し、日常生活経験の豊かさ・健やかさを享受できるようにする方向性をもつ。生命科学と心理学の融合研究は、これらの問題予防や健康増進を社会的還元にまで結びつけ、そのための実証的根拠を与えようとするものである。

本研究で期待される研究成果は、次の4つである。

- (1) 様々なストレス下の生化学的・生理学的変化に対する生命科学的解析(平成28-30年度)
 - ・モデル生物、細胞等を用いたストレスのメカニズム解析など
- (2) メンタルヘルス問題の発現過程における心理学的変化の測定技法の確立(平成28-29年度)
 - ・ヒトの知覚や認知、態度・行動の変化をとらえる指標の同定など
- (3) 環境ストレス下の生化学的・生理学的・心理学的変化の相互影響モデルの作成(平成30-31年度)
 - ・ストレスの影響を説明し得るモデル構築など
 - ・ストレスの肯定的影響を示す生活機能改善指標の同定など
- (4) メンタルヘルス問題発現の予防と健康増進をもたらす新たなアプローチの提案(平成31-32年度)
 - ・介入技法やケアプログラムの作成など

以上の研究成果については、毎年度、研究グループメンバーによる自己点検および外部評価委員による評価・意見聴取を行う。この点検・評価により研究の達成度を確認するとともに、具体的な研究計画の改善と修正を行う。平成30年度に中間評価を、平成32年度に最終評価を受ける。研究推進の過程で、学内および外部関係機関との積極的な協同により、学術的なインクルージョンの達成状況も確認し、立教大学ブランドの強化に対する貢献についても評価を行う。

(3) ブランディングの取組

本事業では、研究成果として得られた、今日のグローバル社会において増大する様々なストレスに関する生命科学的理解、そしてその介入技法の提案を、広く社会に向けて発信することを計画しているものである。具体的な発信の対象としては、当該問題を研究する研究者、当該問題について臨床の現場で対応している医師をはじめとする専門実務家、そして本事業による提案により自らの抱える問題が解決されることを望む一般市民を想定している。

本学は、2015年度に、10年後を見据えた戦略方針・行動目標として、RIKKYO VISION 2024を策定・公表し、加速するグローバル社会の中で待ち受ける未知の課題に挑む「豊かな知性」と「折れない心」を育む人材を育成することを目標として掲げたところである。今回申請する事業は、現在のグローバル社会において直面する深刻な課題に挑戦するものであって、まさにRIKKYO VISION 2024が志向する方向性に合致するものである。RIKKYO VISION 2024は、現段階では教育の側面に重点を置いたものとなっているが、本事業において設定された課題自体が「豊かな知性」と「折れない心」とは何かを科学的に追究するものであり、RIKKYO VISION 2024が目指す内容を研究の側面から補完・補強するものとなっている。その点において、本事業が本学のブランディング推進にふさわしいものであることは論を俟たない。

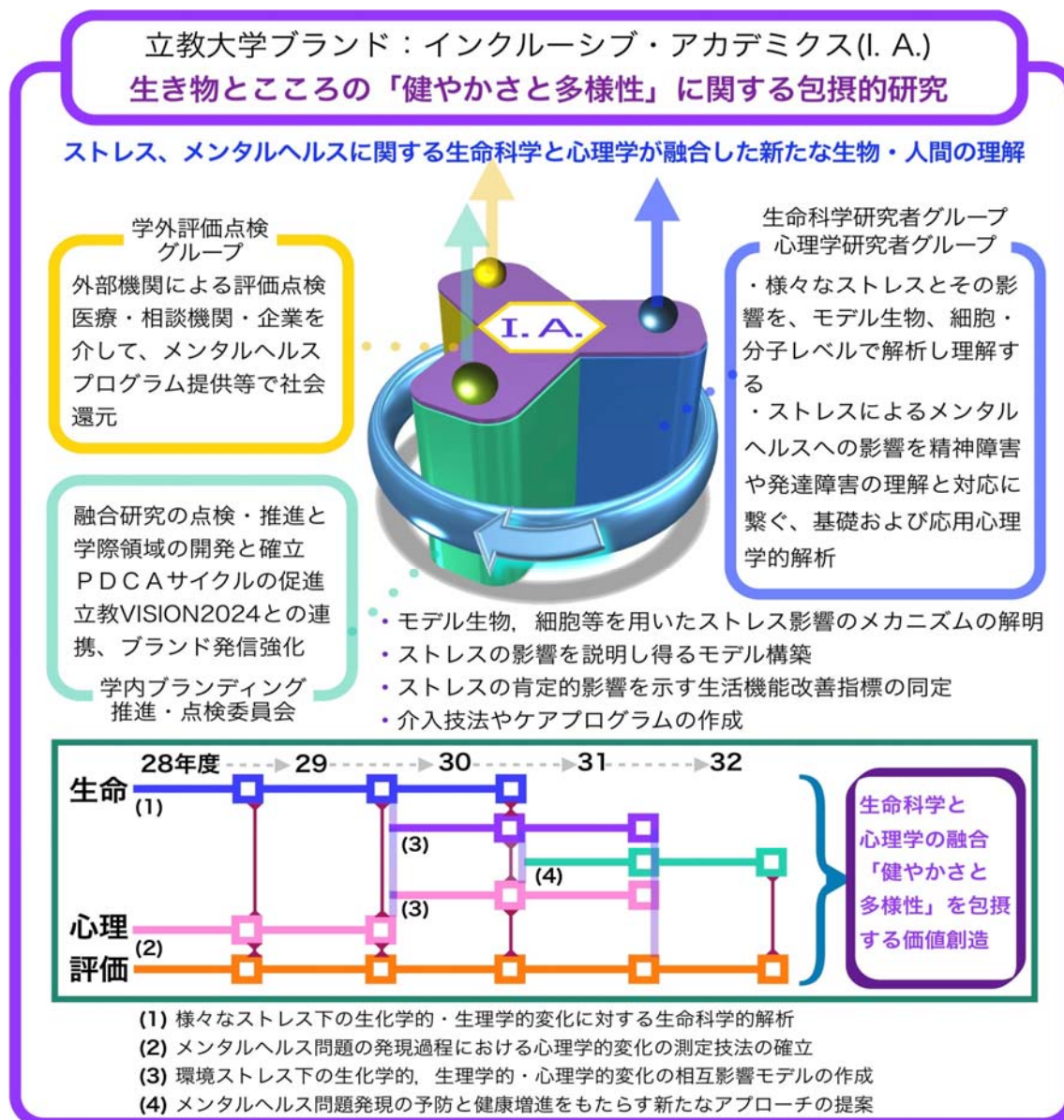
また、本学では、従来よりチャペルやボランティアセンターにより世界市民・現場課題・自他共生の実践の場を整え、研究・教育と実践を結びつけ融合する学びの仕掛け（サービスラーニング等）を設定してきた。本事業における基礎的実証研究（理論知）と応用的社会還元研究（実践知）の接続・融合は、こうした本学の伝統を受け継ぎ発展させるものであり、本学のブランドとして、社会・世界にその成果を広く発信・普及させたい。

本事業によってもたらされる成果については、RIKKYO VISION 2024の継続的広報の一環として、プレスリリース、新聞、雑誌への記事掲載、本学WEBサイトにおける公開など、ブランディング推進・点検委員会において重要かつ有効と認められた媒体を通じて発信し、本学のブランド力を一層高めることとしたい。

3. 事業実施体制（1ページ以内）

インクルーシブ・アカデミクス(I. A.)—生き物とこころの「健やかさと多様性」に関する包摂的研究を推進するために、立教大学総長統括の下、事業体制を「生命科学・心理学融合」、「学内ブランディング推進」、「学外評価点検・連携」と大別し実施する（下図参照）。PDCAサイクルにより評価結果を次年度の計画に反映させることはもちろん、最終年度の5年目には成果報告のための国際シンポジウムを開催し、国内外にその成果を発信する。また、研究成果は、関連医療機関や製薬会社、地域支援相談機関等に介入技法やケアプログラムの新たな提案を行う。また、ストレスの肯定的側面の利用などを観光業などの企業に提案することで社会還元を行う。

基礎的実証研究（理論知）と応用的社会還元研究（実践知）を接続し、本学が掲げる「豊かな知性」と「折れない心」を包摂するインクルーシブ・アカデミクスをブランドとして確立する。



研究参加者

生命科学グループ（立教大学理学部10名）・心理学グループ（立教大学現代心理学部6名）

外部評価委員

委員長：岡野栄之（慶應義塾大学医学部長）

委員：＜生命科学関連＞ 鍋島陽一（先端医療センター長）、吉田秀郎（兵庫県立大学教授）

＜心理・医療関連＞ 秋山剛（NTT東日本関東病院精神科部長）

前本達男（国保旭中央病院・特定非営利活動法人(NPO)コスモスの花）

岡本泰昌（広島大学医学部精神神経科准教授）

学外との連携機関：塩野義製薬株式会社、社会福祉法人みのり福祉会

4. 年次計画（2ページ以内）

平成28年度	
目標	様々なストレスを分子・細胞レベルで解析するための実験方法および環境ストレスによる変化を測定する心理学的な技術の開発を行う。
実施計画	<p>環境ストレスは、生体にメンタルヘルス上の問題を引き起こす。この問題発現の過程で生体には多様な生化学的・生理学的変化が生じている。それらを解析するために、生命科学的解析基盤と心理学的解析基盤を整備する。</p> <p>生命科学グループ：モデル生物や細胞等を用いて様々なストレスのメカニズムを解析する実験系を構築する。</p> <p>心理学グループ：メンタルヘルス問題の発現過程で、ヒトの知覚や認知、態度・行動にも変化が生じる。心理学的な枠組みによりそのような変化を測定する指標の探索・検討を行う。</p> <p>【融合研究】 被験者からのサンプル取得の方法について取り纏め、分析・解析について協議する。</p> <p>【成果の評価】 分子・細胞レベルでのストレスの研究方法とストレスの心理学的影響の測定方法の確立を年度目標とし、学内外評価委員による評価・意見聴取を行う。</p>
平成29年度	
目標	モデル生物・細胞等を用いた様々なストレスによる影響を解析する。また、環境ストレスによるヒトの知覚や認知、態度・行動の変化を心理学的に測定する。それらの結果をふまえ、ストレス下での生化学的、生理学的、心理学的変化の実態を明らかにする。
実施計画	<p>生命科学グループ：様々なストレスによるモデル生物・細胞の変化を分子レベルで解析し、そのメカニズムを解析する。これらの解析のために導入を予定している「realtime PCR」や「DNA配列解析装置」、「共焦点レーザー顕微鏡」等の機器類を現有装置と共に活用する。</p> <p>心理学グループ：研究参加者の協力を得て、適度なストレス課題を行い、注意、記憶、学習に関する行動パフォーマンスの変化を測定し、心理学的な指標に関する詳細な検討を行う。</p> <p>【融合研究】 前年度の協議をもとに、研究参加者から測定の対象となるサンプルを取得して生化学的解析を行うとともに、環境ストレスとストレス関連行動の対応関係について統計的な分析を行う。</p> <p>【成果の評価】 分子・細胞レベルでのストレスのメカニズム解析とストレスによるヒトの心理学的影響の実測を成果目標とし、達成度について、自己点検および外部評価委員による評価・意見聴取を行う。</p>
平成30年度	
目標	前年度までの成果を基に、ストレスによる影響を説明し得るモデルを構築し、それをモデル生物や細胞等で検証する。また、環境ストレスがもつ負の影響を低減し、メンタルヘルス問題の発現を予防するための新たなアプローチ（介入手法やケアプログラム）を形づくるためのパイロットスタディを行う。
実施計画	<p>生命科学グループ：ストレスによる影響を説明するモデルを構築する。生化学的・分子生物学的手法を用い細胞・モデル生物レベルで解析を行う。</p> <p>心理学グループ：メンタルヘルス問題の発現過程で生じるヒトの知覚や認知、態度・行動の変化を一層拡大した研究参加者を対象として検証するとともに、環境ストレスのもつ負の影響を低減したり、メンタルヘルス問題の発現を予防するための新たなアプローチ（介入手法やケアプログラム）を形づくるためのパイロットスタディを行う。その際、観光心理学の視座から提案されるメンタルヘルスツーリズムの実証的な研究知見についても、新たな心理学的アプローチとしての位置づけを行う。</p> <p>【成果の評価】 環境ストレスが負の影響を与える場合を低減・予防するためのアプローチを作成することを年度目標とし、学内外評価委員のみならず研究参加者からもアンケートなどを集め、目標に対する評価と方針を得る。</p>

平成31年度	
目標	家庭・教育機関・医療機関等において、ストレス、メンタルヘルス諸問題を抱える人々や家族等に対する心理学を基盤とする新たなアプローチの効果評価を行う。また、その新たなアプローチの効果の説明する生命科学的なモデルを提示する。
実施計画	<p>【融合研究】前年度までに作成した環境ストレス下の生化学的・生理学的・心理学的変化の相互影響モデルに基づいて、新たな心理学的アプローチを適用し、家庭・教育機関・医療機関等の社会各層において効果測定を行う。効果評価のための指標・測度は前年度までに作成済みである。そこには、生化学・分子生物学的視点が含まれる。</p> <p>【成果の評価】融合研究によるストレスのモデル化とメンタルヘルス問題発現予防プログラムの開発が年度内目標である。評価のために外部関係機関に対するアンケートなども実施し、その効果についての改善に役立てる。</p>
平成32年度	
目標	5年間の研究成果を、国際学術論文発表、関係機関への新たな心理学的アプローチの提案、国際シンポジウムの開催などにより、世界に向けて発信する。
実施計画	<p>【融合研究】5年間の研究成果は、①様々なストレス影響のモデル生物・細胞レベルのメカニズムの解明、②環境ストレスによる変化を測定する心理学的な技術の開発、③環境ストレス下の生化学的、生理学的・心理学的変化の相互影響モデルの構成、④環境ストレスのもつ負の影響を低減したり、メンタルヘルス問題の発現を予防するための新たなアプローチ（介入技法やケアプログラム）の開発などに集約される。そして、その研究プロセスにおいて、生命科学と心理学が融合することにより新たな生物・人間理解が醸成される。これを国際学術論文として発表するとともに、効果が確認された新たな心理学的アプローチとして関係機関に提案し、国際シンポジウムの開催などにより、世界に向けて発信する。</p> <p>【成果の評価】生き物とこころの包摂的研究の価値創造を行い、「健やかさと多様性」のインクルーシブ・アカデミクスの全学的展開と情報発信によりブランドの認知確立を目標とする。5年間の研究を集約し、最終評価を得るための研究成果報告書を作成することはもちろん、シンポジウムの場においても評価を受ける。</p>